

第3回
美しい近畿づくり検討会
平成16年4月22日(木)10:00~12:00
ホテルグランヴィア大阪

議題

(1)美しい近畿づくりに向けた取り組み
方向、実施すべき事項について

- ①佐伯委員話題提供
- ②橋爪委員話題提供
- ③増田委員話題提供
- ④意見交換

川崎委員:

●都市の近代化など歴史的な流れの中で、価値観は変わっていくものだと感じた。例えば、機能を失った川や運河を残していくのか、埋め立てていくのか。あるいは近代的なものを良いものとして評価したり、不調和と評価したり。

●日本の景観形成は、フランスやイギリス流の強権的なタウンプランニングではなく、市民の中から自然発的に出てきたものであった。それが一旦崩壊し、新たにつくるという流れの中で、ある種の権力的な運動が出始めたが根付かず、行政の中でも道路は道路、河川は河川というようにバラバラの仕組みづくりとなっている。

●今、法律ができ、市町村に権限が与えられているが、市町村まかせになっている。そのため市民参加で作り上げるとしても、先進都市事例を参考に議論がなされ、画一的なものになってきている。

●歴史的背景をふまえ、強い美の基準を開する仕組みを、上位計画の中でどのような体制を作り、何を進めていけば良いのかを考えることが大切である。

佐伯委員:

●審美的価値があると認識する人間がいなければ、それは単にそこにあるだけに過ぎない。つまり見る者の価値観の違いが、風景をいかようにも変えてしまう。

●社会の要請が経済成長や物質的な豊かさに向かっていた以上、社会のマジョリティの意志を反映すると、現状のように成らざるを得なかつたのではないか。何を美と捉えるかもその時代のあり方である。

●美しい近畿づくり検討会が出来たということは、近代の都市美とは違う美的感覚が求められているのではないか。もし、経済成長が頭打ちになり、お金は人を幸せにしないという考え方方が21世紀の主流になるとすれば、機能はなくても眺めが美しく、心が癒される川があれば、埋め立てない方が良いと思う。

●美と経済成長との兼ね合いの問題以外に、

災害対策の問題がある。日本の風景として、瓦屋根が並ぶ風景は美しいと思うが、自然災害を考えると近代風の屋根が良いと思う。それが結果として美観を壊すこともあるため、専門家の意見も聞きながらどこで折り合いをつけるかを考えなければならない。

橋爪委員:

●戦後40年間でダメな景色ばかりを作ってきたのではなく、個別には修景事業が増えてきているという認識を大前提にすべきだと思う。時代とともに、美観や景観の価値観は変わるため、今議論をしても30年後には全く違う判断をするかもしれない。時代を反映しながら景観は変わっていくものである。

●宗教的な規範か、近代合理主義的なものか、技術の限界かはわからないが、あるコンセンサスの元に、自ずと美が出来てくる。それはシビックデザインの次元である。

●今回はシビックアートの水準まで高めて議論をするのか否か。歴史的なまちなみが美しいと感じるのは、我々が後で発見しているだけで、当時の人は普通に家を建てて普通に町を作ったというだけである。美観や景観は絶えず発見されるものである。

●近畿から世界に普及する美的まちづくりというメッセージを強く出すならば、上位計画の中に緩やかに「文化の景観、Vision of 近畿」のような華々しい宣言をし、それに対するコンセンサスを得られる自治体の中でアートコミッショナリ的なものをつくるということが出来ても良いのではないか。

●どの次元で議論をしていくのか。デザインのレベルか、アートのレベルか、あるいはまず上位で誰もが美を考えようという指針をつくるのか。

●全国に先駆けて、近畿はアート、美観について考えるのだと高らかに謳って、世界で最も進んだ美しい地域づくりをしているんだと、世界中に説いて回るくらいの心意気があればいい。

岩井委員:

●景観は、各地域のご当地風の個性を持っていることが望ましい。これまで各市町村

や府県単位で、隣とは違う景観条例をつくり、積み重ねてきていている。整備局としては、もっと上位のビジョンをつくるということが必要だと思う。

●昔は間と書いて橋と呼んでいたように、間(ま)の部分が重要だと感じた。また、引き空間から見る景観が大事だという話があったが、それも空間の間だと思う。

●都市の阻害要因は空間がないことである。もっと間のある都市の作り方をすれば、美しいということになるのではないか。公共事業全体も然りで、美しさを持つ余裕がなくなっているのではないか。緑や視点場という見る場もなくなってきたことが問題である。

鳴海座長:

●“近代”という言葉が多く出された。近代社会は、近代技術の根本である機能と法の元の平等で成り立っている。

●近代の国土づくりは、機能、科学技術だけが優先し、芸術文化に関わることをほとんど考慮していないことが問題である。行政の仕組みの中に芸術文化を取り込むことは難しいため、手を掛けないようにしてきた結果ではないか。風景、景観といった場合には、その欠落が最も目に見えてしまう。

●本では、桜や紅葉、銀杏などの日本の樹木が美しく映えるような環境づくりに考慮しようと書いてあっても方法論がわからない。

●東洋に西洋建築を持ってくると風景が壊れてしまうという風土的特徴があるのでないかということに気づいてながら、我々は深く追求してこなかった。

●風景も言葉に表す必要がある。言葉を通じて様々な人が風景の意味合いに慣れ親しんでいく。言葉で表せるということは市民に理解が得やすいということである。

●兵庫県の花いっぱい県民運動では、参加することにより、地域を理解したり、関心を持ち、地域の景色や風景はただ味わうものではなく、参加してつくっていくものだと感じられている。働きかけにより、より大きいものが返ってくるということを考えていくことが、美しい地域づくりの出発点ではないか。

●市民の理解がなく、事業者がしっかりしたものをを作るだけでは不十分である。それを味わう心と味わう力がなければ、地に足の着いた施策にならないのではないか。

●どのように捉えれば地域は美しいのかという考え方をわかりやすく共有することが大事ではないか。様々なものを発見すると、捨てがたいものがたくさんあると思う。

●また、近畿の地形の特徴の中には名所がたくさん分布していることをみんなが知っている。風景の見方をわかりやすく説明することで、近畿の良いところがわかる。

●機能だけでつくるのではなく、もう一方の芸術や文化も考慮していこうということが、美しい近畿づくりのモットーかもしれない。